令和6年度 全国学力･学習状況調査の分析について

〔国語〕

1 結果分析

全国平均と比べ、問題内容『読むこと』の正答者は全国平均と比べ同程度か上回っているが、

次の　○言葉の特徴や使い方に関する事項

　　○情報の扱い方に関する事項

　　○我が国の言語文化に関する事項

に該当する設問の正答者が全国平均よりも下回っている。

また　○言葉の特徴や使い方に関する事項（行書の特徴をふまえた書き方についての問題）

　　○情報の扱い方に関する事項

については、全国平均よりも大きく下回っている。

このことから、本校の国語科では、

　　○言葉の特徴や使い方に関する事項

　　○情報の扱い方に関する事項

に課題があると考えられる。さらに正答率は全国平均と比べると同程度だが、『読むことに関する問題（本文を要約する問題・図の役割について選択する問題）』も、半数ほどの生徒が理解していない可能性が高い。

2 国語科課題解決に向けて

実際の授業展開においては引き続き「授業づくりのユニバーサルデザイン化（UD化）」に取り組み、「学習内容や本時の目標の明示」「授業の流れの確認」「学習できる環境づくり」など、生徒全員が参加できる授業作りをおこなっていく。また、個別の生徒理解を深め、生徒一人一人に合った学びを実践していきたい。

課題の解決にむけて、基礎的な言語知識の定着を図るとともに、情報を取り出して正確に理解する力、情報を整理して適切に表現する力が求められる。「朝読書」や「授業づくりのUD化」を引き続き行い、授業の中で様々な情報（文章・図表）の中から、関係を見いだし、結び付けて理解、整理する取り組みを行っていく必要がある。

〔数学〕

1 結果分析

結果から読み取れる「重点的に指導すべきと考えられる問題」は5問あり、その中でも特に全国との差が顕著なものは、『合同の証明』と、『一次関数のグラフの変化』の問題である。正当数の平均で見ると『合同の証明』の領域において全国平均を若干下回っているが、他の領域では全国平均を上回っている。また、ヒストグラムで見ると全国では滑らかなカーブを描いているのに対して、本校のヒストグラムは滑らかなカーブにはならず、凹凸している。このことから、数学の学習内容をよく理解している生徒が全国に比べて多くの割合で在籍しているが、その逆に学習内容が定着していない生徒も多く在籍していることがわかった。本校の数学科の課題は、基礎の定着を図るとともに、『合同の証明』と『一次関数のグラフの変化』の領域に関わる学習に重点を置くことである。

2 数学科課題解決に向けて

授業展開においては、学校全体で取り組んでいる「学習内容や本時の目標の明示」「授業の流れの確認」「考える時間の確保」など、授業のユニバーサルデザイン化に取り組み、生徒全員が参加できる授業作りをおこなっていく。また、数学により興味が持てるように生徒の気付きを促し、「主体的・対話的で深い学び」を実現していきたい。基礎の定着に関しては、生徒同士の教え合い活動を活用し、説明する側、説明を受ける側、両者にとって意味のある時間を作ることで定着につながると考える。また、授業の終わりに振り返りの時間をとり、「何を学んだのか・できるようになったのか」「既習事項が何につながったのか」「何が理解できなかったのか」などメタ認知の視点から数学的な欲求が高まるような取り組みをおこなっていく。視覚的な学習支援が効果的であることから、ICT機器を有効に活用した授業作りをおこなっていく。

〔生活面について〕

分析結果から、人間関係が希薄になりやすい中、集団の中での自分という存在価値に気づいていない生徒がおり、自信がなく、人間関係のつまずきにつながっている。学習をはじめ、行事や学校生活全般において、他者とかかわる機会を増やすことで、生活と学習が向上していくのではないかと考える。

① 授業改善

どの教科でも活動ある授業展開（ICT の活用、グループ学習やペア学習等）によって、生徒同士が協働的な学びを行い、課題解決に取り組むようにする。主体的に学ぶことで、理解度を高めるたけではなく、自己有用感を高めていく。

② 一人一台のタブレット端末の活用

家庭学習の時間を増やすために、授業で実践している協働的な学びを家庭学習で活かすようにする。解決できない問題があれば、タブレットで調べるなどして、孤立した学びにならないように、見方や考え方を働かせるような手立てとする。

③ 特別活動・道徳・総合

問題解決に向けて、他者との話し合いを通して、自分の考えや意見を言葉で表現するだけではなく、新たな発見から自分の考えを深め、他者の思いも同時に考える機会を作る。また生徒自身によって学校や学級を自治的な空間を作る活動の展開を図る。